

# 水がきた！

「水だ！ 水がきたぞう！」

「ほんとに、水がきたあ！」

人々から大きな歓声と拍手がわき起こりました。

待ちに待った水。

勢いよく水路を流れだす水。

心おどらせ水をむかえに集まった人々

の喜びにあふれた顔、顔。

暖かな日差しを浴びて、水を跳ねあげる子どもたち。

この乾いた「いなみ野台地」にやっと



水が届いた瞬間です。

それは今から百年以上も前の明治二十四年（一八九一）の春のことでした。

これからのお話は、水をもとめ続けたいなみ野の人々の、言葉では言い尽くせないほどの苦勞と努力の物語です。

## いなみ野をひらく

いなみ野の田畑をうるおす水路の水は、ずっと前から流れていたものではありません。水路ができるまでに、たくさんの人々の気の遠くなるような努力があったのです。

いなみ野の名は千年以上も昔の「万葉集」という歌集にも見られ、古くか

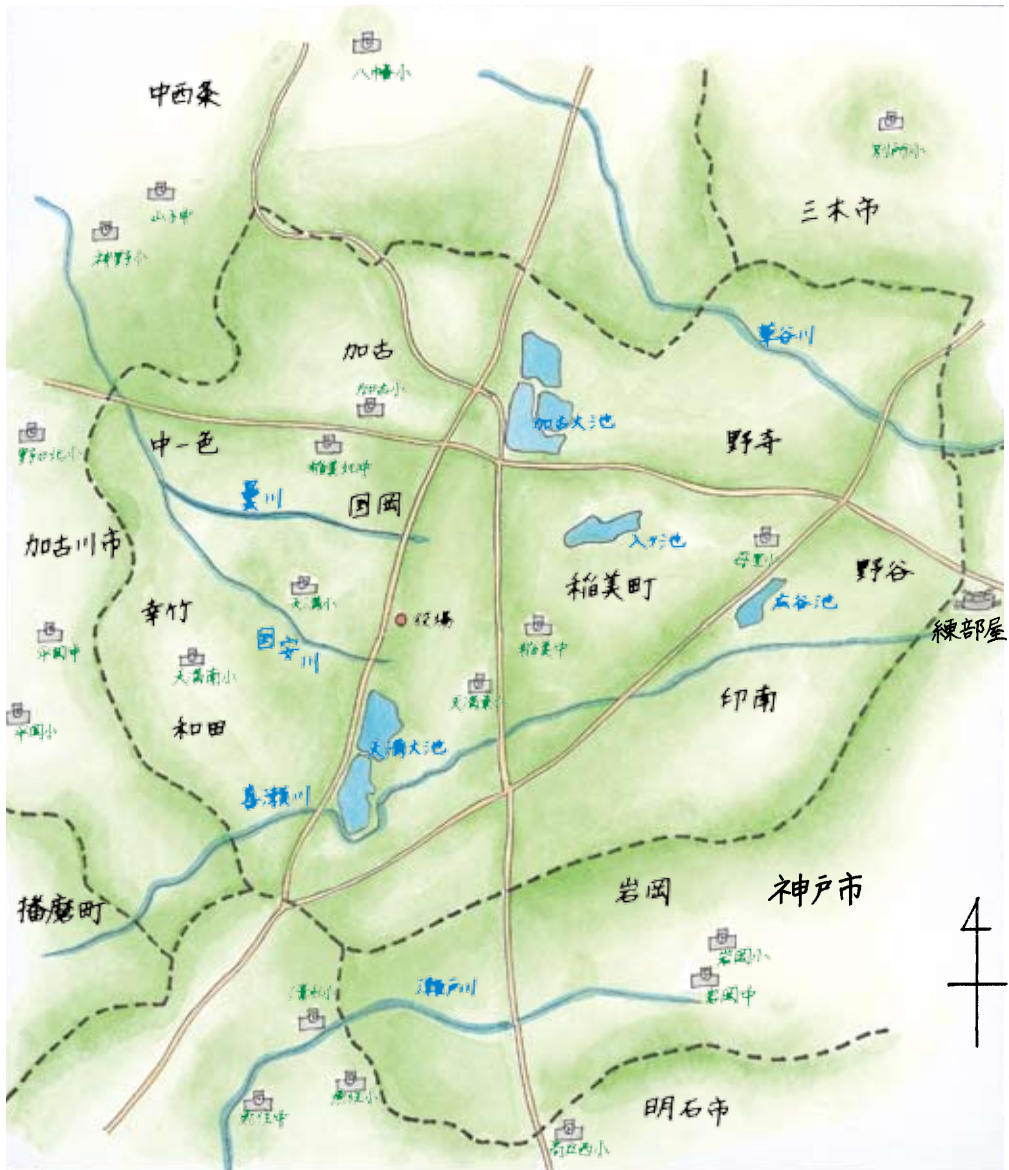
ら知られた所でした。

ここは、日本の中でも特に雨が少ない地域です。また、まわりの土地よりも一段高い台地となっているために、近くには、加古川や美囊川・明石川といった大きな川がありますが、昔の技術では、そこから水を引くことはとてもむずかしかったです。

台地を流れる草谷川・曇川・国安川・喜瀬川・瀬戸川は、川といってもほとんどまとまった水が流れていませんでした。それでも、人々はいくつかの小さな流れをせき止めて、※おか岡の大池や入之池※にゆうのいけな



※岡の大池：今の天満大池  
※入之池：今の入ヶ池



どの「ため池」をつくり、少しずつくらし始めていました。  
 今から三百五十年ほど前に、中西条の加古沢兵衛さんたちが姫路の殿様に許可をもらい、いなみ野の荒地をたがやして、加古新村をつくりました。

その時に、北池きたいけや南大池みなみおおいけ・跡池あといけ・中池なかいけ・五軒屋池ごけんやいけなどのため池をつくりました。これらを一つにしたのが、現在げんざいの加古大池かこおおいけです。

いなみ野は、もともと雨が少ない所ですから、いくら大きなため池をつくっても米づくりに十分な水をためることはできません。そこで、台地を流れる近くの川から水を引こうということになりました。

けれども、川の水は昔から川沿いかわぞの村の人々が使っていて、その村にとっても米づくりに必要な大切な水でした。だからたとえ一滴いってきの水でもゆずってもらうことはむずかしかったのです。

そこで、加古新村かこしんむらの人々は、ある工夫をしました。それは、川からため池まで水路を掘りほ、米づくりをしない冬の間川の水をもらい、ため池にためておいて夏の米づくりに使うというものでした。

こうした人々の智恵ちえと工夫によって、いなみ野台地の開発はさらにすすみ、野谷のだにや国岡くにおか・幸竹こうたけ・和田わだ・中一色なかいつしきなどの新村が次々と生まれ、最後に印南新いんなみしん

村<sup>むら</sup>がつくられました。しかし、印南<sup>いんなみ</sup>新村<sup>しんむら</sup>は台地で一番高い場所にあったため、水を引く川もなく、ほとんどが畑地ばかりで米は少ししか作れませんでした。そこで人々は、乾<sup>かわ</sup>いた土地にも強い綿<sup>わた</sup>を作り、その生活も少しずつ楽になり始めました。

## 明治になつて

明治という新しい時代になるころ、いなみ野の人々には、三つの困ったことがありました。



綿の花

一つめは、外国から安い綿わたが輸入ゆにゅうされたので、せっかく作った綿わたが売れなくなりました。

二つめは、何年も日照りが続いたことです。作物が実らず、食べるものがなくなってしまうほどの苦しい生活でした。それでも、村の人々は齒をくいしばって、自分たちが開いたこの土地を離はなれようとはしませんでした。

そして、三つめは「地租ちそ改正かいせい」による重い税金ぜいきんでした。これは、その年の作物の取れ高に關係なく、それぞれの土地につけられた値段ねだんにもとづいて税金ぜいきんを払はらうという、新しいしくみでした。

印南新村いんなんしんむらでは、そうして決められた税金ぜいきんが、今までの四倍以上にもなっていたので村の人々はおどろきました。

「これは何かのまちがいや。」

「こんな高い税金ぜいきんは払はらいようがない。」

と、口々に不満を言いました。

そこで、村の代表の丸尾茂平次まるおもへいじさんが、県の役所に行き、

「私わたしたちはどうしても納得なっとくがいきません。この金額きんがくでは畑を売って払はらうしか方法がないのです。それでも全部の税金ぜいきんは払はらいきれません。どうか調べ直してください。お願いです。」

と、一生懸命いっしょうけんめいに訴うったえました。しかし、県の役人やくにんは、

「今は国づくりの真っ最中だ。多少の無理があっても、決まった税金ぜいきんをおさめねばならん。」

と、言うばかりでした。

印南新村いんなんしんむらの人々は、「これらの大きな問題を解決かいけつするためには、米づくりしかない！」と、考えるようになりました。

そのためには、何よりもまず「水」が必要だったのです。